

英語の不定詞演算子節について*

西 前 明

1. はじめに

(1a)・(2a)に含まれる不定詞節は不定詞関係節 (infinitival relatives) と呼ばれる。

- (1) a. The knife [to cut the ham with] is on the table.
b. The knife [Op to cut the ham with] is on the table.
- (2) a. The knife [with which to cut the ham] is on the table.
b. *The knife [which to cut the ham with] is on the table.

(1a)については、(1b)で示す通り空演算子Opが関与していると仮定し、このような不定詞節を不定詞Op節 (infinitival Op-clause) と呼ぶことにする。一方、顕在的Wh演算子を含む不定詞節は不定詞Wh節 (infinitival Wh-clause) と呼び、不定詞Op節と不定詞Wh節をまとめて不定詞演算子節 (infinitival operator clause) と呼ぶことにする。不定詞Wh関係節は、(2a)のようにWh関係詞が前置詞を随伴する場合にのみ許される。

* 本稿は、日本言語学会第142回大会 (2011年6月18・19日、於日本大学)、及び、日本言語学会第145回大会 (2012年11月24・25日、於九州大学)における口頭発表を修正・編集したものである。外池滋生氏、江頭浩樹氏、並びに査読者の方々より貴重なご助言を頂き、また、Charles Laurier氏、Michael Smith氏にインフォーマントとしてご協力頂いた。厚くお礼申し上げます。本稿における不備の責任は全て筆者にある。

(3a) に含まれる不定詞節は不定詞目的節 (infinitival purpose clause) と呼ばれ、(3c) の不定詞理由節 (infinitival rationale clause) と呼ばれる不定詞節とほぼ同じ意味を持つとされる (Bach (1982), Jones (1985) を参照)。(3d) で見るように、不定詞理由節は主語を修飾する位置には生起できない。このことから不定詞目的節も主語を修飾する位置には現れないと考えられる。ゆえに、(1a) に目的節の解釈はない。なお、(制限的) 関係節は、代名詞、及び、すでに同定された名詞を修飾しないので、(3a) に関係節の解釈はない (Jones (1985: 20) を参照)。

- (3) a. (My friend recommended a knife_i to me.) I bought the *knife_i/it_i* [to cut the ham with].
b. (My friend recommended a knife_i to me.) I bought the *knife_i/it_i* [Op to cut the ham with].
c. (My friend recommended a knife_i to me.) I bought the *knife_i/it_i* [(in order) to cut the ham with it].
d. *The knife [(in order) to cut the ham with it] is on the table.

(3b) で示す通り、不定詞目的節についても Op が関与していると仮定する。一般に文献に登場する不定詞目的節は、(3a) のような (本稿の用語を用いれば) 不定詞 Op 節であるが、今回の研究に協力してくれたインフォーマントは、(4a) のように目的節として不定詞 Wh 節も容認した¹。

- (4) a. (My friend recommended a knife_i to me.) I bought the *knife_i?/it_i* [with which to cut the ham].
b. (My friend recommended a knife_i to me.) *I bought the *knife_i/it_i* [which to cut the ham with].

不定詞 Wh 目的節も、Wh 関係詞が前置詞を随伴する場合のみ許される。

Chomsky and Lasnik (1977) は、不定詞関係節の現象を、特定の記号列を排除する独立したフィルターによって処理しようとした。これに対し、Hasegawa (1998) は、その種のフィルターに頼らず、不定詞関係節の派生に関わる機構の中に、非文法的な構造を排除する仕組みを組み込んだ。本

稿では、Hasegawaの、フィルターに頼らないという方針に従う一方で、Hasegawaの分析の問題点を指摘し、Chomsky (2008)のミニマリストの枠組みで、その問題点を解消する代案を構築する。なお、本稿は不定詞関係節と不定詞目的節の内部構造は同じであるという立場に立つ²。

2節で、Hasegawaの分析の問題点を指摘する。3節で、Chomsky (2008)の枠組みで、英語の不定詞演算子節を派生する仕組みを提案する。それを支持する経験的証拠として、4節で、石居 (1985) が挙げたデータなどを取り上げる。5節で、不定詞演算子節に絡むforについて述べる。

2. Hasegawa (1998) の分析

Hasegawa (1998: 7-14) は、不定詞節CPを補部とする空の前置詞Pを仮定し、さらにこの空前置詞Pは解釈不可能の素性 [+P] を持ち、これが補文標識のfor及び不定詞のtoを含む顕在的前置詞が持つ解釈可能な [+P] によって照合されると仮定する。さらにHasegawa (1998: 10-12) は、Rizzi (1990: 66-68) に沿って、関係節CPの指定部と主要部の間に、(5) のような、素性 [wh] に関する一致の制約を立て、「顕在的wh関係詞 = [+wh]; 関係節の顕在的補文標識 (that 及び for) 及び不定詞の to = [-wh]; 空演算子及び関係節の空補文標識は [±wh] を持たない」と仮定した。

- (5) If the Spec of a relative CP contains an element with the feature [+wh], the head C of the CP must not have the feature [-wh]. (Hasegawa 1998: 12)

また、HasegawaはPesetsky (1995: 8) の、空補文標識は接辞であるという仮説に従い、不定詞節の空補文標識はtoに接辞添加されなくてはならないとし、またその添加の過程について、Bobaljik (1995) に基づき次の二つの過程を仮定した。

- (6) a. adjunction via head-to-head movement in syntax (followed by ‘morphological merger,’ in Bobaljik’s terms)
 b. morphological merger with (i.e. phonetical realization on) a phonetically adjacent element (ibid.: 14)

Hasegawaは以上の道具立てを用いて、Chomsky (1995)の初期のミニマリストの枠組みで不定詞関係節の特性を説明する。例えば (7) のような例では、補文標識 *for* が空前置詞 *P* に非顕在的に移動して、*P* が持つ解釈不可能な [+P] を照合し、一方、(8) のような例では、*to* が顕在的に空補文標識 *C* に移動し、そこからさらに非顕在的に *P* まで移動して *P* の [+P] を照合する。

- (7) a book [PP [P(+P)]] [CP Op₁ [C for(+P), [-wh)]] [IP Bill [I to(+P), [-wh)]] read *t*₁]]
- (8) a book [PP [P(+P)]] [CP Op₁ C [IP (PRO) [I to(+P), [-wh)]] read *t*₁]]
-

非文法的な (9) のような例では、*C* に移動した *to* の [-wh] と *CP* の指定部にある *wh* 関係詞の [+wh] が衝突し、(5) の一致の制約に違反する。

- (9) *a book [PP [P(+P)]] [CP [which(+wh)]₁ C [IP (PRO) [I to(+P), [-wh)]] read *t*₁]]
-

(9) において、*to* が *C* を経由しないで直接 *P* へ移動することは主要部移動制約 (Head Movement Constraint) によって禁止されるので、(9) は一致の制約の違反を避けることができない。一方、空演算子 *Op* は [±wh] を持たないので、*Op* を含む (7) や (8) のような例では、*CP* の指定部と主要部の間でそのような素性の弁別的不一致は起こらない。

(7) において、空前置詞 *P* の解釈不可能の [+P] を照合するのは *for* の [+P] であり、(8) では *to* の [+P] であるが、(10) のような例では、*wh* 関係詞が随伴する前置詞が持つ [+P] がその役割を果たす。

- (10) a pen [PP [P(+P)]] [CP [PP [with(+P)]] [which(+wh)]]₁ C [IP (PRO) [I to(+P), [-wh)]] write *t*₁]]
-

(8) と (9) において、接辞である空の *C* は、(6a) の、主要部移動による

統語的付加を伴う形態的併合によってtoに添加されるが、(10)では、(6b)の、統語操作を伴わない形態的併合によって添加される。すなわち、(10)において、toは移動せずにIの位置に留まっている。空のCは[±wh]を持たないので、そのため(9)と異なり、CPの指定部と主要部の間で[wh]素性の衝突は起こらない。不定詞関係節において顕在的wh関係詞が生起できるのは、(10)のような前置詞を随伴する場合に限られるという事実は、そのようにして説明される。前置詞を随伴していても、(11)のように顕在的補文標識forがある場合は、forの[-wh]とwh関係詞の[+wh]が一致の違反を引き起こし非文となる。

- (11) *a pen [PP [P([+P])] [CP [PP [with([+P])] [which([+wh])]]]I [c for([+P],[-wh])] [IP Bill to write t₁]]
-

以上のHasegawa (1998)の分析について問題点を指摘したい。(8)のような場合、toはCの位置でスペルアウトされる仕組みになっているが、すると、(12)のようなnotを含む構造が派生できないと思われる。

- (12) And that was another thing [not to think about].

(Collins Wordbanks: youbooks0010)

Hasegawaの分析に従うと、(12)において、toはCの位置でスペルアウトされるので、notはCより左に位置することになる。しかし、(13)で見ると、補文標識であるforの左にnotを置くことはできないので、(12)においても、notはCより右に位置していると見るべきである³。ゆえに、(12)は、toがCに少なくとも顕在的には移動していない証拠とみなすことができる。

- (13) a. What he wanted was [for her not to have been married to his father].

(Collins Wordbanks: ukbooks0009)

- b. *What he wanted was [not for her to have been married to his father].

(a.の意味で)

Hasegawaは、(8)のような例において、toがIの位置でスペルアウトされ、後に非顕在的にCを経由してPに移動する可能性について論じていない。もしそれが可能であり、かつ、Iの位置でスペルアウトされたto対して、空のCを右方に形態的併合によって追加することが可能なら、PF表示としてnot to Vを出力することができるかもしれない。しかしChomsky (2008)の位相 (phase) 理論の枠組みでは、スペルアウトされた領域に再び統語操作を適用することはできないので、toがIの位置でスペルアウトされてしまうとPに移動することができず、よって、Pが持つ解釈不可能の[+P]の照合が果たされず派生は破綻する。

本稿では、この問題を解消する代案をChomsky (2008)のミニマリストの枠組みで構築するが、Hasegawa (1998)における、不定詞節CPを補部とする空の前置詞、及び、(10)に見られる、不定詞節CPの指定部からの前置詞の移動、という仮説には従う。

3. 不定詞演算子節の派生についての提案

3.1. Chomsky (2008)のv*Pと定形節CP

v*Pと定形節CPの派生については、Chomsky (2008)に従う。

(14) Chomsky (2008)のv*Pと定形節CP (例えばwe cut itの派生)

(X = 任意の主要部; [v* v*+ cut] = 付加構造; 移動した要素の元の位置は取り消し線で表示する)

[_{XP} X [_{CP} C [_{TP} we [_T T [_{v*P} we [_{v*} [_{v* v*+ cut}] [_{VP} it [_v ~~cut it~~]]]]]]]]]]]

(14)において、cutがv*から(探査子 (probe) の)一致素性を継承 (inheritance) し、目的語itの(目標子 (goal) の)一致素性を照合して対格を付与する。この時、itはVPの指定部に移動し、cutはv*に付加される。v*Pは位相 (phase) なので、Tと併合 (Merge) される直前に補部のVPが音韻部門と意味部門に転送 (transfer) される。TはCから(探査子の)一致素性を継承し、主語weの(目標子の)一致素性を照合して主格を付与する。weはTPの指定部に移動する。CPは位相なので、Xと併合される直前に補部のTPが転送される。

3.2. 前置詞句 p*P

前置詞句の派生について (15) を提案する⁴。(15) は (16) の仮定を含んでいる。

(15) 前置詞句 p*P (例えば with it の派生)

[_{XP} X [_{p*P} [_{p*P} p*+ with] [_{PP} it [_P with it]]]]

(16) 語彙的前置詞 P と p* は付加構造を成す。

前置詞句の主要部は、(14) における v* と同じく対格を付与する機能範疇であると仮定し、これを p* と表示する。前置詞の目的語の格照合は、(14) の v*P における目的語の格照合と平行的である。with が p* から (探査子の) 一致素性を継承し、目的語 it の対格を照合する。it は PP の指定部に移動し、with は p* に付加される。p*P は位相なので、X と併合される直前に補部の PP が転送される。語彙的 P と p* の付加は、語彙的 V と v* の付加と同じく義務的であるとし、(16) を仮定する⁵。

3.3. PRO を主語とする不定詞節、および、for を補文標識とする不定詞節

PRO を主語とする不定詞節 CP については、Kanno (2008) に従って、この CP は位相ではなく、また、空格 (null case) の照合はなく、PRO は TP の指定部には移動せず動詞句内に留まる、と仮定する⁶。例えば、to cut it の派生は (18) のようになる。(18) において、PRO は v*P の指定部から動かない。この CP は位相ではないので、X と併合された段階でも TP は転送されていない。一方、for を補文標識とする不定詞節の派生は、(14) の定形節 CP の派生と平行的であると仮定する。例えば、for us to cut it の派生は (19) のようになる。(19) において、to が for から (探査子の) 一致素性を継承し、us の対格を照合する。us は TP の指定部に移動する。この CP は位相なので、X と併合される直前に補部の TP が転送される。

(17) a. C_{inf} (= infinitival C) と PRO の間に格照合はなく、C_{inf} は位相主要部ではない。

b. for は位相主要部である。

(18) PRO を主語とする不定詞節 CP (例えば to cut it の派生)

- [_{XP} X [_{CP} C [_{TP} to [_{v*P} PRO [_{v*} [_{v* v*+} cut] [_{VP} it [_v eat it]]]]]]]]]
- (19) for を補文標識とする不定詞節 CP (例えば for us to cut it の派生)
- [_{XP} X [_{CP} for [_{TP} us [_T to [_{v*P} us [_{v*} [_{v* v*+} cut] [_{VP} it [_v eat it]]]]]]]]]]]

不定詞節について位相になるものとならないものを仮定するのは、動詞句に v*P と vP の二種を設けるのと同じことであると思われる。対格を照合する for および v* は位相主要部であるが、格照合を行わない C_{inf} および v は位相主要部ではない。

3.4. 不定詞 Op 節

まず移動に関して (20) の制約を仮定し、顕在的 Wh 関係詞・空演算子 Op・不定詞節空補文標識 C_{inf} のそれぞれの演算子関連素性に関して (21) のように指定する。演算子の素性 ([Wh_{rel}] / [Op]) は解釈可能 (interpretable) であり、C_{inf} の素性 ([Op]) は解釈不可能 (uninterpretable) であるとする^{7,8}。

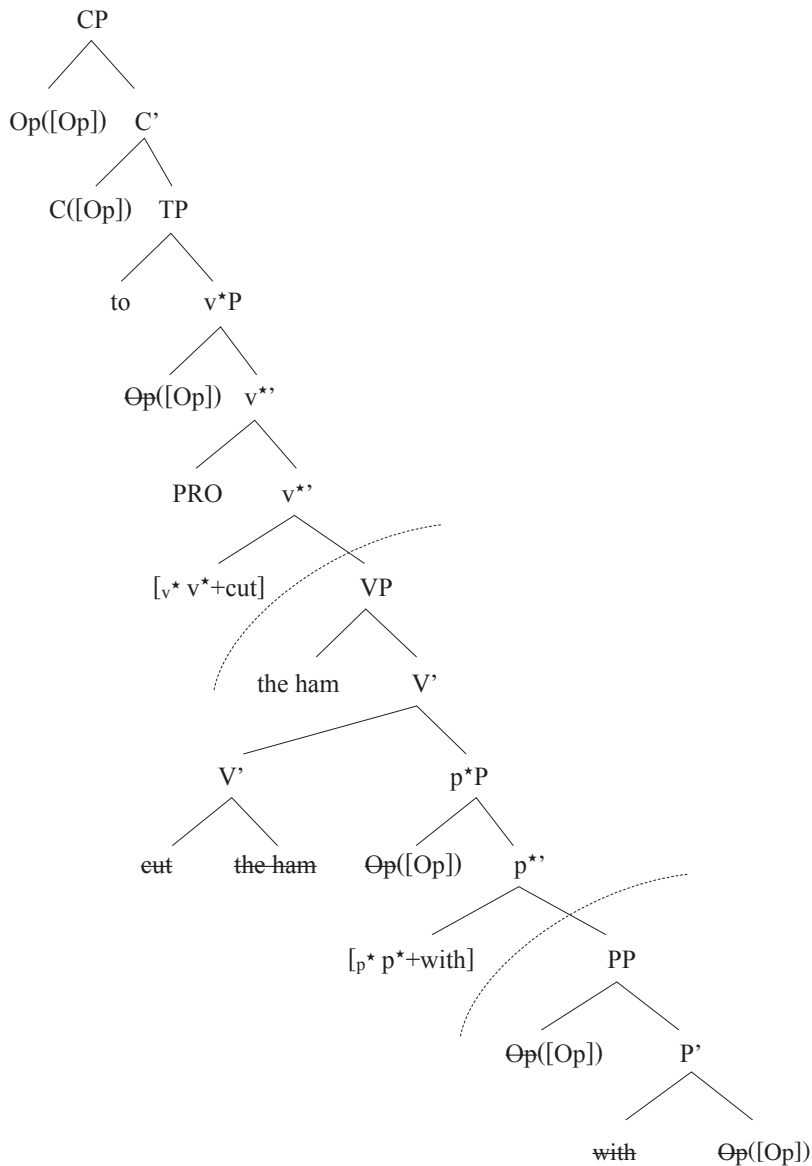
- (20) 最終着地点への移動は一致 (= 照合) によって引き起こされる: (a) において、H₂ の指定部への α の移動は最終着地点への移動ではないので、 α と H₂ の間に一致関係はなくてもよい。(b) において、H の指定部への α の移動が最終着地点への移動であるなら、 α と H の間に一致関係がないので、この移動は許されない。
- a. [[_{Spec} α ([F])] H₁([F]) [... [_{Spec} t ([F])] H₂([θ)] [... t ([F])]]]([θ] = 「[F] を持たない」)
- b. *[[_{Spec} α ([F])] H([θ)] [... t ([F])]]
- (21) a. 顕在的 Wh 関係詞 = [Wh_{rel}]
- b. 空演算子 Op = [Op]
- c. 不定詞節空補文標識 C_{inf} = [Op] or [θ] ([θ] = 「演算子関連素性を持たない」)

(22) に含まれる不定詞 Op 節の派生は、(23) のようになると考える⁹。

- (22) a. The knife [Op to cut the ham with] is on the table.

b. I bought it [Op to cut the ham with].

(23) 不定詞Op節の派生 (Op to cut the ham with)



(23) において、with が p* から（探査子の）一致素性を継承し、Op の対格を照合する。Op は PP の指定部に移動し、with は p* に付加される。Op は PP が転送される前に p*P の指定部に移動する（p*P は位相なので、cut the ham と併合される前に補部の PP が転送される）¹⁰。Op はさらに、VP が転送される前に v*P の外側の指定部に移動する（v*P は位相なので、T と併合される前に補部の VP が転送される）。PRO は格照合に関与せず、v*P の指定部から動かない。C と v*P の外側の指定部にある Op の間で素性 [Op] の照合（＝一致）が起こり、Op は CP の指定部に移動する。

一方、(24) に含まれる前置詞を随伴しない非文法的な不定詞 Wh 節の派生として、(25a) と (25b) を考える（簡略化して表示する）。

(24) a. *The knife [which to cut the ham with] is on the table.

b. (My friend recommended a knife_i to me.) *I bought the knife_i [which to cut the ham with].

(25) a. *[CP [which([Wh_{rel}])]₁ [C(*[Wh_{rel}])] [TP to PRO cut the ham [p*P with t₁]]]

b. *[CP [which([Wh_{rel}])]₁ [C([θ])] [TP to PRO cut the ham [p*P with t₁]]]

(25a) では、(21c) により、C_{inf} が Wh 関係詞の移動を引き起こす素性 [Wh_{rel}] を持つことは許されない。(25b) では、C と which の間で素性の一致がない。ゆえに、which の最終着地点である CP の指定部への移動が、一致によって引き起こされたものではないので、(20) の移動の制約に違反する。

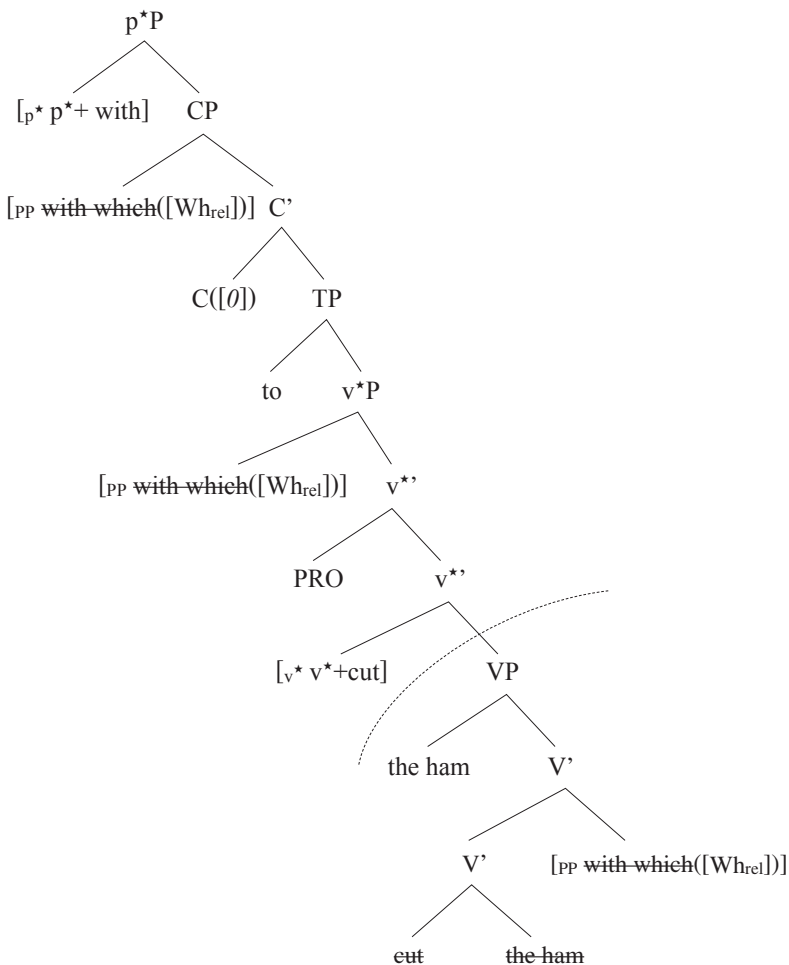
3.5. 前置詞を随伴する不定詞 Wh 節

2節で見たように、Hasegawa (1998) は、不定詞関係節において顕在的 wh 関係詞が生起できるのは、前置詞を随伴する場合に限られるという事実を説明するために、不定詞節 CP を補部とする空の前置詞を仮定した。本稿では、(15)・(16) で提案した p* がその役割を担うものとし、(26) を仮定する（p* は対格を付与する機能範疇であり、最終的に語彙範疇 P と付加構造を成す）。

(26) p* は補部として不定詞節 CP を選択できる。

(27) に含まれる前置詞を随伴する不定詞 Wh 節の派生として、(28) を提案する。

- (27) a. The knife [with which to cut the ham] is on the table.
 b. (My friend recommended a knife_i to me.) I bought the knife_i [with which to cut the ham].
- (28) 前置詞を随伴する不定詞 Wh 節の派生 (with which to cut the ham)



(28)において、with whichはp*Pの殻に入っていないPPの形で基底生成される^{11, 12}。whichは格素性が未照合の状態(VPが転送される前に)v*Pの外側の指定部にwithを随伴して移動する¹³。(28)において、C([0])は演算子関連素性を持っていないので、Cとv*Pの指定部にあるwith whichの間で素性の照合はなく、ゆえに、この段階(=p*とCPが併合される前)ではまだwith whichはCPの指定部へは移動しない。次に、(26)に基づいてp*とCPが併合される。併合後も、C_{inf}は位相主要部ではないのでTPは転送されずに残っている((17)・(18)を参照)。Cがp*から(探査子の)一致素性を継承する。そして、v*Pの指定部にあるwhichの対格を照合し、with whichはCPの指定部に移動する(すなわち、(28)において、with whichのCPの指定部への移動は、p*との格照合によって起こるものであり、Wh関係詞の移動を引き起こす演算子関連素性によるものではない¹⁴)。ここで、withがCPの指定部からp*に主要部移動できると仮定する(2節の(10)で見たように、Hasegawa (1998)もCPの指定部からの前置詞の主要部移動を仮定している¹⁵)。withはp*に付加され、そこで(16)の条件が満たされる。

一方、(29)に含まれる前置詞を随伴しない非文法的な不定詞Wh節の派生として、(30)と(31)が考えられる(簡略化して表示する)。

(29) a. *The knife [which to cut the ham with] is on the table.

b. (My friend recommended a knife_i to me.) *I bought the knife_i [which to cut the ham with].
(= (24))

(30) a. *[_{CP} [which([Wh_{rel}])]₁ [C(*[Wh_{rel}])] [_{TP} to PRO cut the ham [_{p*P} with t₁]]]]

b. *[_{CP} [which([Wh_{rel}])]₁ [C([0])] [_{TP} to PRO cut the ham [_{p*P} with t₁]]]]
(= (25))

(31) * [_{p*P} p* [_{CP} [which([Wh_{rel}])]₁ [C([0])] [_{TP} to PRO cut the ham [_{PP} with t₁]]]]

(30)の不適合性についてはすでに(25)で述べた。(31)では、whichはp*と格照合関係に入れるが、withとp*が付加構造を成しておらず、(16)の条件が満たされない。このようにして(27)と(29)の対立、すなわち、「不定詞Wh(関係・目的)節は、Wh関係詞が前置詞を随伴する場合にの

み許される」という事実は説明される。

2節で、Hasegawaの分析では(32)のような場合、toがCの位置でスペルアウトされる仕組みになっているので((8)を参照)、(32b)のようなnotを含む構造が派生できないと思われることを見た(notがCの左に位置していることになる)。

- (32) a. another thing [to think about]
 b. ... another thing [not to think about] (= (12))

本稿が提案する仕組みでは、toの移動はないので、notは常にTP内にあると見ることができる。(32b)の派生について問題は生じない。

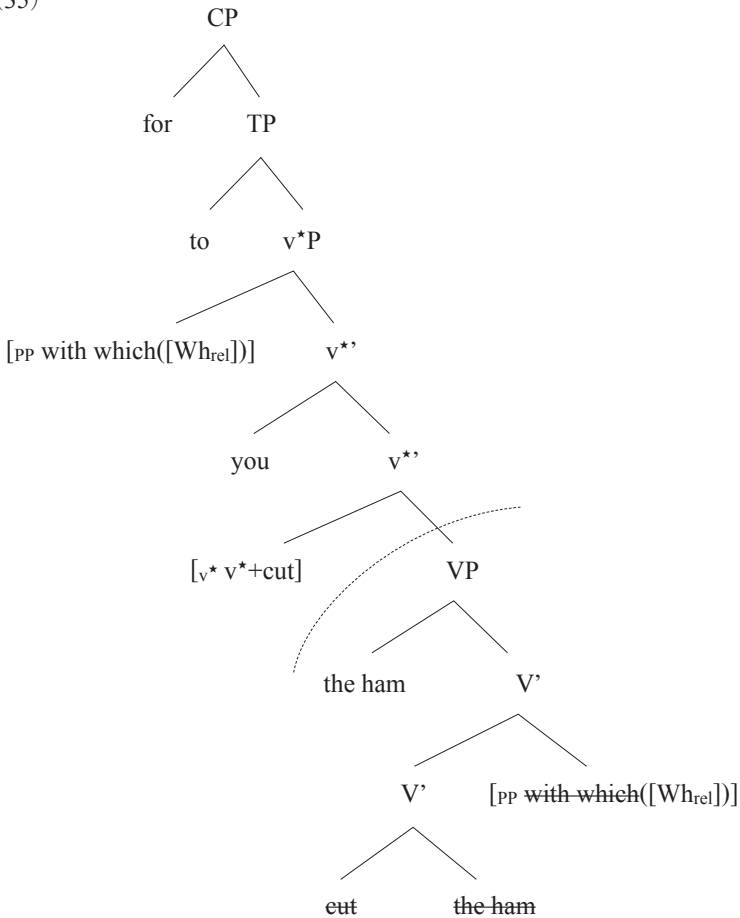
3.6. forを補文標識とする不定詞Wh節

(33)と(34)の対立を説明したい。(33)に含まれる前置詞を随伴する文法的な不定詞Wh節では、(28)で見たように、空補文標識 C_{inf} が用いられている。(34)で見るように、 C_{inf} を顕在的補文標識forに代えると非文となる¹⁶。

- (33) a. The knife [with which to cut the ham] is on the table.
 b. (My friend recommended a knife_i to me.) I bought the knife_i [with which to cut the ham]. (= (27))
- (34) a. *The knife [with which for you to cut the ham] is on the table.
 b. (My friend recommended a knife_i to me.) *I bought the knife_i [with which for you to cut the ham].

(34)の不定詞節の派生において、forとTPが併合された段階の構造は(35)のようになる¹⁷。

(35)



(35)において、forから（探査子の）一致素性を継承したtoは、目標子を求めて照合領域（=C統御域）であるv*P内を探索する。v*Pの内側の指定部にyouがあり、外側の指定部にwithを随伴したwhichがある¹⁸。youの格素性もwhichの格素性もまだ照合されていない。ここで、照合（=一致）に関して（36）の制約を仮定する¹⁹。

(36) 素性 [F] を照合する探査子 H([F])が、未照合の素性 [F] を担う α([F])

と β ([F])をC統御し、かつ α ([F])が β ([F])をC統御する場合、H([F])が β ([F])と照合(=一致)関係に入ることは許されない。

(35)において、探査子toはwith whichとyouをC統御し、with whichはyouをC統御している。whichの素性が[PP with which]まで浸透(percolation)すると仮定すると、(36)の照合の制約によって、with whichより低い位置にあるyouが探査子toと照合関係に入ることは許されない²⁰。ゆえに、youの対格の照合が果たされず派生は破綻する。(37)のような派生は成立しない(元の位置のwith whichは痕跡*t*で表示する。cutとthe hamの移動は省略する)。

(37) $*[p^*P [p^* p^{*+} \text{with}] [CP [PP \text{with which}([\text{Wh}_{\text{rel}}]])]_1 \text{for} [TP \text{you to} [v^*P t_1' \text{you} v^* [VP \text{cut the ham } t_1]]]]]$

なお、(17)で規定した通り、PROは格照合に関与しないので、(28)の派生において、(35)で起こるような問題は生じない。

3.7. CPとp*Pについて

すでに述べたように、(38)の不定詞Wh(関係・目的)節は、(39)のような、CPがp*Pの殻をかぶったものである。

- (38) a. The knife [with which to cut the ham] is on the table.
 b. (My friend recommended a knife; to me.) I bought the knife; [with which to cut the ham]. (= (27))
- (39) $[p^*P [p^* p^{*+} \text{with}] [CP [PP \text{with which}([\text{Wh}_{\text{rel}}]])]_1 [C([\emptyset])] [TP \text{to} [v^*P t_1' \text{PRO} v^* [VP \text{cut the ham } t_1]]]]]$ (= (28))

一方、(40)の不定詞Op(関係・目的)節の派生は(41)のようになる。(42)のような、CPがp*Pの殻に入る派生は、(31)と同じ理由で収束しない(Opはp*と格照合関係に入れるが、withとp*が付加構造を成しておらず、(16)の条件が満たされない)。すなわち、不定詞Op節は常にCPである²¹。

- (40) a. The knife [Op to cut the ham with] is on the table.
 b. I bought it [Op to cut the ham with]. (= (22))
- (41) $[_{CP} [Op([Op])]_i [C([Op])] [_{TP} to [_{v^*P} t_1] PRO v^* [_{VP} cut the ham [_{p^*P} t_1] [_{p^*} p^* + with] [_{PP} t_1] [_{P'} with t_1]]]]]$ (= (23))
- (42) $*[_{p^*P} p^* [_{CP} [Op([Op])]_i [C([\theta])] [_{TP} to [_{v^*P} t_1] PRO v^* [_{VP} cut the ham [_{PP} with t_1]]]]]$

ここで触れておきたいのは、不定詞Op節と不定詞Wh節は語彙範疇が異なるのに、関係節あるいは目的節として、同じ意味解釈を受けられるという点である。しかし、この点に関しておそらく問題は無い。変形生成文法理論の歴史において、意味解釈あるいは統語機能の異同は、語彙範疇だけでなく、句構造上の位置や θ 関係によってもとらえられてきた。そのような理論の枠組みでは、例えば(43a, b)に意味の対立が見られなかったとしても、それは必ずしも両者の括弧で囲んだ句の語彙範疇が等しいことを示す証拠とはみなされないだろう。例えば、(43a)のXPはCPであり、(43b)のYPは p^*P であって、両者はともに付加詞として副詞的機能を果たしている、と仮定しても、少なくとも概念上の問題は生じないはずである。

- (43) a. I bought it [XP to cut the ham with].
 b. I bought it [YP in order to cut the ham with it].

本稿のシステムを大まかに述べると：不定詞演算子節CPはそれ自体で関係節・目的節の機能を果たすことができるが、 p^* と結合して p^*P になっても同じ機能を果たせる。ただし、統語的要因により、 p^*P として収束できるのは、結果的に(39)のような前置詞を随伴する不定詞Wh節の場合に限られる²²。

4. 不定詞Wh(関係・目的)節におけるWh関係詞の移動の局所性

本稿のシステムにおいて、不定詞Op節におけるOpの移動は、Cとの演算子関連素性([Op])の照合によって駆動される移動であるが((23)を参照)、不定詞Wh節における前置詞を随伴するWh関係詞の移動は、 p^* と

の格照合によるものである（(28)を参照）。すなわち、両者は異なる種類の移動である。これを支持する経験的証拠として（44）を提出する。（44）は石居（1985）が（本稿の用語を用いれば）不定詞Op関係節と不定詞Wh関係節の違いとしてあげたものである。

- (44) a. I found a cot [to arrange [for Mary to sleep on]].
 b. *I found a cot [on which to arrange [for Mary to sleep]].
 c. I found a cot [on which I could arrange [for Mary to sleep]].
 (石居 1985: 73)

(44a) は不定詞Op節、(44b) は不定詞Wh節、(44c) は定形Wh関係節の例であるが、この中で（44b）のみが非文となる。本稿のシステムではそれぞれの派生は（45a-c）のようになる（V (=sleep/arrange) の移動は省略する。（a）・（c）ではp*P内の移動も省略する）²³。

- (45) a. [CP [Op([Op])]I [C([Op])] [TP to [v*P t1'' PRO v* [VP arrange [CP t1'' for [TP Mary to [v*P t1' Mary v* [VP sleep [p*P p* [PP on t1]]]]]]]]]]]
 b. *[p*P [p* p* + on] [CP [PP on which([Whrel])]I [C([θ])] [TP to [v*P t1'' PRO v* [VP arrange [CP t1'' for [TP Mary to [v*P t1' Mary v* [VP sleep t1]]]]]]]]]
 c. [CP [p*P p* [PP on which([Whrel])]I [C([Whrel])] I could arrange [CP t1'' for [TP Mary to [v*P t1' Mary v* [VP sleep t1]]]]]]]

(45a-c) のそれぞれにおいて、for と TP が併合された段階の構造は（46a-c）のようになる（V (=sleep) と p*P 内の移動は省略する）。

- (46) a. [CP for [TP to [v*P [Op([Op])]I Mary v* [VP sleep [p*P p* [PP on t1]]]]]]]
 b. *[CP for [TP to [v*P [PP on which([Whrel])]I Mary v* [VP sleep t1]]]]]
 c. [CP for [TP to [v*P [p*P p* [PP on which([Whrel])]I Mary v* [VP sleep t1]]]]]

(46a-c) において、for から（探査子の）一致素性を継承した to は、目標子を求めて照合領域（= C 統御域）である v*P 内を探索する。（46a-c）の全てにおいて、v*P の内側の指定部に、格素性がまだ照合されていない Mary

がある。(46a)と(46c)で、それぞれ外側の指定部を占めているOpとonを随伴したwhichは、どちらもp*P内において、すでにp*との間で格照合を終えている(p*Pの正確な構造については(15)及び(23)を参照)。一方、(46b)において外側の指定部を占めているのは、p*を伴わないPP on whichである。ここでwhichの格素性はまだ照合されていないので、(36)の照合の制約によって、on whichより低い位置にあるMaryが探査子toと照合関係に入ることは許されない(whichの素性は[PP on which]まで浸透するものとする。(35)の議論を参照)。すると、Maryの照合が果たされずに派生は破綻する。(45b)のような派生は成立しない。一方、(46a)と(46c)では、探査子toとMaryの間に未照合の格素性を担う要素は介在せず、Maryの格照合は、(36)の照合の制約を破ることなく果たされる。

不定詞Op節におけるOpの移動と定形Wh関係節における前置詞を随伴するWh関係詞の移動は、格照合を済ませた要素の移動であり、ゆえに、移動先で他の要素の格照合を妨げて派生を破綻させることはない。一方、不定詞Wh節における前置詞を随伴するWh関係詞の移動は、格照合を済ませていない要素の移動なので、移動先で他の要素の格照合を妨げて派生を破綻させる可能性がある。この分析によって、本稿で新たに提出する次の例についても説明が可能である。(47)の不定詞Op節と(48)の定形Wh関係節の例は全て文法的であるが、(49)の不定詞Wh節の例では、(49a, b)のみが文法的である。

- (47) a. I bought the shelf [Op₁ to set all of my books in t₁].
 b. I bought the shelf [Op₁ to try to set all of my books in t₁].
 c. I bought the shelf [Op₁ to convince you to set all of your books in t₁].
 d. I bought the shelf [Op₁ to arrange for you to set all of your books in t₁].
- (48) a. I bought the shelf [[in which]₁ I intended to set all of my books t₁].
 b. I bought the shelf [[in which]₁ I intended to try to set all of my books t₁].
 c. I bought the shelf [[in which]₁ I intended to convince you to set all of your books t₁].
 d. I bought the shelf [[in which]₁ I intended to arrange for you to set all of your books t₁].

- (49) a. I bought the shelf [[in which]_I to set all of my books *t*₁].
 b. I bought the shelf [[in which]_I to try to set all of my books *t*₁].
 c. *I bought the shelf [[in which]_I to arrange for you to set all of your books *t*₁].
 d. ??I bought the shelf [[in which]_I to convince you to set all of your books *t*₁].

文法的な (49a, b) の不定詞 Wh 節の派生は、(50a, b) のようになる (V (= set/try) と all of my books の移動は省略する)。

- (50) a. [_p*P [_p* p*+ in] [_{CP} [_{PP} in which([Wh_{rel}])]]_I [C([*θ*])] [_{TP} to [_v*P *t*₁' PRO v* [_{VP} set all of my books *t*₁]]]]]
 b. [_p*P [_p* p*+ in] [_{CP} [_{PP} in which([Wh_{rel}])]]_I [C([*θ*])] [_{TP} to [_v*P *t*₁' PRO v* [_{VP} try [_{CP} C [_{TP} to [_v*P *t*₁' PRO v* [_{VP} set all of my books *t*₁]]]]]]]]]]]

不定詞 Wh 節における前置詞を随伴する Wh 関係詞の移動は、p* を伴わない PP の移動であり、すなわち、格照合を済ませていない要素の移動であるが、(50a, b) の派生の中に、in which によって格照合を妨害される要素はない (PRO は格照合に関与しない。(17) 及び (28) を参照)。

非文法的な (49c) は (44b) と同じ形の文である。(49c) の不定詞 Wh 節の派生において、for と TP が併合された段階の構造は (51) のようになる (V (=set) と all of my books の移動は省略する)。

- (51) *[_{CP} for [_{TP} to [_v*P [_{PP} in which]_I you v* [_{VP} set all of your books *t*₁]]]]]

v*P の内側の指定部に you があり、外側の指定部に PP の in which がある。どちらもまだ格照合を済ませていない。(36) の照合の制約によって、in which より低い位置にある you が、(for から一致素性を継承した) to と照合関係に入ることは許されず、ゆえに、you の対格の照合が果たされず派生は破綻する。

最後に、(49d) のいわゆる目的語制御構造 (object-control structure) を含む例については、Hornstein (2005) に従い、(52) で示す通り、you が目

的語制御動詞 convince の不定詞補文の動詞 set の外項として基底生成されると仮定する。(52) は (49d) の不定詞 Wh 節の派生の途中の段階である (V (= set/convince) と all of my books の移動は省略する)。

(52) $*[{}_{v^*P} \text{ PRO } v^* [{}_{VP} \text{ convince } [{}_{CP} C [{}_{TP} \text{ to } [{}_{v^*P} [{}_{PP} \text{ in which}]_1 \text{ you } v^* [{}_{VP} \text{ set all of your books } t_1]]]]]]]$

(52) の下位節の v^*P において、(51) と同じく、内側の指定部に **you** があり、外側の指定部に PP の **in which** がある。どちらもまだ格照合をすませていない。ここで、**you** の上位節への移動は、(上位節の) v^* から (探査子の) 一致素性を継承した **convince** との格照合によって駆動されると仮定すると、(52) の段階で、**in which** が **convince** と **you** の間の格照合を妨げて派生を破綻させることになる²⁴。

5. for について

演算子と不定詞節空補文標識 C_{inf} の演算子関連素性については、すでに (53) のように仮定したが、補文標識 **for** の素性については、(54) のように仮定する。

(53) a. 顕在的 Wh 関係詞 = $[Wh_{rel}]$
 b. 空演算子 Op = $[Op]$
 c. 不定詞節空補文標識 C_{inf} = $[Op]$ or $[0]$ (= (21))

(54) 補文標識 **for** = $[0]$ (= 「演算子関連素性を持たない」)

(56) は、非文法的な (55) に含まれる不定詞 Wh 節の派生である (簡略化して表示する)²⁵。

(55) a. *The knife [with which for you to cut the ham] is on the table.
 b. (My friend recommended a knife_i to me.) *I bought the knife_i [with which for you to cut the ham]. (= (34))

(56) a. $*[{}_{CP} [{}_{p^*P} \text{ with which} ([{}_{Wh_{rel}}])]_1 [{}_{for} (*[{}_{Wh_{rel}}])] \text{ you to cut the ham } t_1]$

b. * $[_{CP} [_{p^*P} \text{ with which}([Wh_{rel})]]_I [\text{for}([\emptyset])] \text{ you to cut the ham } t_1]$

(56a) では、(54) により、for が Wh 関係詞の移動を引き起こす素性 $[Wh_{rel}]$ を持つことは許されない。(56b) では、for と with which の間で素性の一致がない。ゆえに、with which の最終着地点である CP の指定部への移動が、一致によって引き起こされたものではないので、(20) の移動の制約に違反する。

(54) に従い、補文標識の for が空演算子 Op の移動を引き起こす素性 $[Op]$ も担えないとすれば、(57) の中括弧で囲んだ部分の構造は、(58a) ではなく (58b) のようになる (簡略化して表示する)²⁶。

(57) a. I bought it {for you to cut the ham with}.

b. The knife {for you to cut the ham with} is on the table.

(58) a. $[_{CP} [_{Op}([\text{Op}])]]_I [\text{for}([\text{Op}])] \text{ you to cut the ham with } t_1]$

b. $[_{p^*P} \text{ for you}] [_{CP} [_{Op}([\text{Op}])]]_I [C([\text{Op}])] \text{ to PRO cut the ham with } t_1]$

(58b) において、for は補文標識ではなく前置詞であり、you を補部とする^{27, 28}。for you は機能範疇の p^* と併合されて、不定詞節とは独立した p^*P を成す。不定詞節の補文標識は空の C_{inf} であり、不定詞節の主語は PRO である。

6. まとめと課題

Hasegawa (1998) は、英語の不定詞関係節の現象を、Chomsky and Lasnik (1977) で提案されたタイプのフィルターに頼らないで説明しようとした。本稿では、Hasegawa の、フィルターに頼らないという方針に従う一方で、Hasegawa の分析の問題点を指摘し、Chomsky (2008) のミニマリストの枠組みで、その問題点を解消する代案を構築した²⁹。

Hasegawa と同じく、不定詞節を補部として取れる空の前置詞を仮定したが、本稿ではこの空の前置詞を、Chomsky (2008) の機構における v^* と同じく対格を付与する機能範疇であると仮定し、これを p^* と表示した。

本稿のシステムにおいて、空演算子 Op の移動は C との演算子関連素性の

照合によって駆動され、一方、前置詞を随伴する Wh 関係詞の移動は、 p^* との格照合によって引き起こされる。それを支持する経験的証拠として、石居（1985）が挙げたデータなどを取り上げた。

最後に、本稿では（59）の仮説に対して、独立した経験的証拠を与えることができなかった。おそらくこの点が最も大きな欠陥であろう。今後の課題としたい。

（59） p^* は補部として不定詞節 CP を選択できる。 (= (26))

注

1. (ib) と制限的定形関係節の例である (id) の対立から、(ib) の不定詞節は制限的関係節ではないと言える。また、不定詞関係節の (iia, b) と非制限的定形関係節の (iid) の対立から、(iia, b) の形の不定詞関係節には非制限用法はないことがわかる。ゆえに、(ib) の不定詞節はいわゆる関係節ではないと言えよう。なお、(ic) が (ib) に比べて容認度が低いのは、(if) が (ie) に比べて容認度が低いと同じことであり、すなわち、Wh 関係詞が人称代名詞を先行詞にとりにくいことによると考える。もっとも、(ic) は (if) より容認度が低いとする判断も中にはあった。今のところその理由は不明であるが、より重要なことは、そのように判断したインフォーマントも (ic) は (ig) より容認度が高いと判断したことである。

- (i) a. (My friend recommended a knife_i to me.) I bought the *knife_i/it_i* [to cut the ham with].
 - b. (My friend recommended a knife_i to me.) I bought the knife_i [with which to cut the ham].
 - c. (My friend recommended a knife_i to me.) ?I bought it_i [with which to cut the ham].
 - d. (My friend recommended a knife_i to me.) *I bought the knife_i [with which I intended to cut the ham].
 - e. (My friend recommended a knife_i to me.) I bought the knife_i, [with which I intended to cut the ham].
 - f. (My friend recommended a knife_i to me.) ?I bought it_i, [with which I intended to cut the ham].
 - g. (My friend recommended a knife_i to me.) *I bought it_i [with which I intended to cut the ham].
- (ii) a. (I bought a knife_i.) *The knife_i [to cut the ham with] is on the table.

- b. (I bought a knife_i.) *The knife_i [with which to cut the ham] is on the table.
 c. (I bought a knife_i.) *The knife_i [with which I intend to cut the ham] is on the table.
 d. (I bought a knife_i.) The knife_i, [with which I intend to cut the ham], is on the table.
2. 不定詞目的節と不定詞関係節の内部構造が同じであるとすれば、両者の意味・機能の違いは、外部構造、すなわち、句構造上の位置から導かれることになる。Jones (1985: 24-31) は、不定詞関係節が名詞句内にあるのに対して、不定詞目的節は動詞句内にあると想定している。例えば次の例において、(ia) の不定詞節には関係節の解釈しかないが、(ib) の不定詞節には関係節と目的節の両方の解釈がある。
- (i) a. The knife [to cut the meat with] was bought by every camper.
 b. What John did was buy the knife [to cut the meat with].
- このような句構造上の位置の違いから導かれる意味・機能の違いについてのさらなる調査は今後の課題とする。
3. 本稿は5節で、不定詞演算子節に絡む for は補文標識ではなく、不定詞節とは独立した前置詞句を成す前置詞であると主張する。ゆえに(i)のようなデータを not が補文標識 for の左に生起しない証拠として提出することはできない。
- (i) a. That was another thing for you not to think about.
 b. *That was another thing not for you to think about. (a. の意味で)
- しかし、不定詞演算子節において not が C の左に生起できると想定しても、(13) のような for が標準的に補文標識とみなされている構文では not は for の左に生起できないので、両者の違いが問題となる。
4. Matsubara (2000) が、格位置に生起する前置詞句の研究において、語彙的 PP を補部とする位相主要部の p*、および、P の p* への接辞化をすでに提案している。しかし Matsubara の主張では、前置詞句が p*P となるのは、格位置に生起する場合のみである。それ以外の場合は PP であり、P の p* への接辞化も起こらない。一方、本稿では、P は必ず p* と付加構造を成す (= 接辞化される) と考えている。なお、Matsubara が分析した現象については、本稿では論じる余裕がなかった。
5. Chomsky (2008: 143, 149) は、語彙項目は範疇未定の語根であり、それらを選択する v や n などの機能的要素がその語根の範疇を決定する、という可能性に触れている。
6. Baltin (1995) は遊離数量詞の分布を PRO 残留の証拠とみなした。遊離数量詞は派生のどこかの段階で被修飾語と隣接して生起するのだとすれば、(v) の繰り上げ構文では、they が to の指定部を経由するためそこに all が生起できるが、(ii)・(iii)・(iv) のコントロール構文では、PRO が to の指定部に

移動しないためそこに all が生起できないと説明される。

- (i) a. For these people to all leave would be inconvenient. (Baltin 1995: 227)
 - b. For these people all to leave would be inconvenient. (ibid.: 211)
 - (ii) a. To all have been doing that would have been inconvenient. (ibid.)
 - b. *All to do that would be inconvenient. (ibid.)
 - (iii) a. The men promised me to all resign. (ibid.: 222)
 - b. *The men promised me all to resign. (ibid.)
 - (iv) a. They promised to all leave. (Sportiche 1988: 444)
 - b. ??They promised all to leave. (ibid.)
 - (v) a. They seemed to all have left at the same time. (ibid.)
 - b. They seemed all to have left at the same time. (ibid.)
7. (i) に含まれるような疑問演算子のふるまいについて本稿では扱わないが、 C_{inf} がそれらの移動を引き起こす素性を持っていることは明らかだと思われる。
- (i) a. I decided [with which knife to cut the ham].
 - b. I decided [which knife to cut the ham with].
8. Chomsky (2008: 151) は、Wh 移動を駆動する解釈不可能の素性は不要であり、Wh 句の最終着地点がどこであろうと派生は収束し、意味接合面 (semantic interface) で適格な解釈が得られるかどうかは、Wh 句の最終着地点がどこであるかによる、と主張している。本稿では、Wh 移動を (一致 (= 照合) によって) 駆動する演算子関連素性は必要である、と考える。ただし、Wh 句の解釈については、Chomsky の提案に沿って、Wh 句の最終着地点が適切な位置 (本稿では CP の指定部とみなす) であれば適格な解釈が得られるものとする。注 22 も参照。
9. 目的節は主語を修飾する位置には現れないので、(22a) は関係節の例である。(制限的) 関係節は、代名詞、及び、すでに同定された名詞を修飾しないので、(22b) は目的節の例である。(27a) ・ (27b) についてもそれぞれ同じ。
10. Chomsky (2008: 147, 149-151) に従うと、(23) において、Op は PP の補部から PP の指定部と p^*P の指定部へ同時並行的に移動することになると思われるが、この点は本稿の議論を左右しない。
11. (28) において、with which が PP で基底生成されることを強制する規則を立てる必要はない。もし p^*P で基底生成されれば、which の格照合が ((23) における Op と同じく) その p^*P の内部で済んでしまう。ゆえに、(一番上の) p^* の格照合が果たされず派生は破綻する。また、最終着地点である CP の指定部への移動が、一致によって引き起こされたものではなくるので、(20) の移動の制約にも違反する。
12. Chomsky (2008: 144) によると、併合の適用は自由である。これに従えば、いかなる要素間の併合も強制されない。C と TP の併合も直接強制されるこ

とはない。(ia)のECM構文における不定詞節TPも、(ib)に含まれるTPも、ともに位相主要部のCを伴わずに生起しているが、併合の適用の観点からはどちらにも問題はない。(ib)の不適格性は、weの格素性が照合されないこと、whichが演算子として解釈されないこと、などから来る。(28)においても、with whichが位相主要部のp*を伴わずに基底生成されること自体に問題はない。位相主要部を伴わないTPやPPを許す条件・規則を特に設ける必要はないと考える。

(i) a. the book [_{CP} which C [_{TP} they T [_{v*P} they v* believe us [_{TP} to [_{v*P} us v* like which]]]]] (中間コピーは省略)

b.*the book [_{TP} T [_{v*P} we v* like which]]

Chomsky (2008: 143)は、CPとDPの類似性から、DPも位相である可能性を示唆している。DPが位相であれば、(iia)のイディオム表現において、DPの補部(NPと表示する)が位相主要部を伴わずに生起しているように見える。さらに興味深いことに、Chomsky (2008: 148, fn. 31)は、位相主要部であるCとv*の補部(TP, VP)は移動できないと述べているが、(iii)で見えるように、NPは、位相主要部を伴わずに基底生成された場合に限り移動できる。(28)におけるwith whichの移動も、位相主要部を伴わずに基底生成されたPPの移動である。

(ii) a. The baby was taken [_{NP} good care] of by the mother.

b.*The baby was taken [_{DP} the [_{NP} good care]] of by the mother.

(iii) a. [_{NP} Good care]₁ was taken t₁ of the baby by the mother.

b.*[_{NP} baby]₁ was taken good care of [_{DP} the t₁] by the mother.

(ii)・(iii)の分析が正しければ、次のことが言えるかもしれない: 位相主要部の補部になり得る要素が位相主要部を伴わないで基底生成された場合、動けるかどうかは範疇によって異なる(TP・VPは動けないが、NP・PPは動ける);しかし、位相主要部の補部の位置からは、範疇を問わず動くことはできない。検証および説明は今後の課題とする。

13. (28)において、VPが転送されたとき(with) whichの格素性は未照合のままであるが、「接合面(interface)で派生を破綻させるのは、解釈できない素性を担う連鎖(chain)の先端部(head)である」と仮定する。すなわち、VP内の(with) whichは連鎖の先端部ではないので、未照合の格素性を担っていても派生を破綻させることはない、とする。
14. (with) whichのWh句としての解釈については、注8を参照。
15. Hasegawa (1998: 13-14)はこれに似た移動としてBaker (1988: 167-180)の動詞編入(verb incorporation)のあるタイプを挙げている。Bakerは、Bantu諸語の一つであるKinyarwanda語における、補文の目的語を主節の主語とする受動化された使役文に対して、(i)のような派生を仮定している。(i)

において、補文CP内のVPがそのCPの指定部に移動し、その位置から主要部のVが使役形態素のv*に（動詞編入として）主要部移動する（[passive]=受動形態素）。

(i) [IP NP_{OBJ} [I' I [v*P [v* V+v*(+[passive])] [CP [VP [V][NP_{OBJ}]]] [C' C [IP NP_{SUBJ} [I' I [VP [V][NP_{OBJ}]]]]]]] (order irrelevant)

16. (34) については (56) も参照。
17. 補文標識 for の演算子関連素性については5節で論じるが、その問題はこの節の議論を左右しない。
18. Chomsky (1995: 358-359) は、v*P の内側の指定部をある要素が移動によって占め、外項は外側の指定部を占めるという派生の可能性を示唆している。本稿ではそのような派生は許されないと仮定する。
19. (36) の制約のねらいは、Hが α を飛ばして β とのみ一致するのを禁じることであるが、Hが α と β の両方と一致関係に入ること、すなわち Hiraiwa (2008) タイプの多重一致 (multiple-agree) を許す仕組みも、もし必要なら採用してもよい。(35) において、with which と you の両方が探査子 to と照合関係に入ることになると、with which の格照合はここで済んでしまう。すると、(37) において、p* の格照合が果たされず派生は破綻する。また、最終着地点である CP の指定部への移動が一致によって引き起こされたものではなくるので、(20) の移動の制約にも違反する。
20. Chomsky (2008: 142) の格照合のシステムでは、格素性は目標子の側にしかなく、探査子 (C-T および v*-V) の側には ϕ 素性しかないと仮定されているが、本稿では探査子の側も格素性を持っていると仮定する。よって、(35) における to, (v*P の指定部にある) with which, you を (36) の条文に当てはめると、H([F]) = to; α ([F]) = with which; β ([F]) = you; F = [case] となる。
21. (ia) で見ると、空演算子 Op は随伴移動ができないので、(ib, c) のような派生は阻止できなくてはならない。しかし、Op の随伴の問題は、(ii) で見ると、定形節においても生じるものであり、よって、本稿では扱わない。
- (i) a. *the knife [with Op to cut the ham]
 b. [_p*P [_p* p*+ with] [CP [_{PP} with Op([Op])] _I [C([θ])] [TP to [_v*P t_I' PRO v* [VP cut the ham t_I]]]]]
 c. [CP [_p*P with [Op([Op])] _I [C([Op])] [TP to [_v*P t_I' PRO v* [VP cut the ham t_I]]]]]
- (ii) a. the knife [Op (that) I intend to cut the ham with]
 b. *the knife [with Op (that) I intend to cut the ham]
22. 本稿の仕組みでは、(i) のように、CP の指定部に演算子を含まない PP が移動しても派生が収束してしまうと思われる。このような派生は、(ii) のような意味解釈規則によって意味接合面で不適格とされると仮定する ((ib)

は (ia) の派生)。

- (i) a. *I was surprised [at the scene]₁ to look *t*₁.
 b. *I was surprised [_p*P [_p*P*+ at] [_{CP} [_{PP} at the scene]₁ [_C([*θ*])] to PRO look *t*₁]].

(ii) CPの指定部にある要素は演算子でなくてはならない。

(統語部門における派生は収束するが、意味接合面で適格な解釈が得られないという構造については、Chomsky (1995: 290-291; 2008: 151)を、意味解釈規則の位置付けについては、Chomsky (2008: fn. 11)をそれぞれ参照。)

23. (45c) について、定形節空補文標識は、不定詞節空補文標識と異なり、顕在的 Wh 関係詞の移動を引き起こす素性 [Wh_{rel}] を持つと仮定する。
24. (49c) と (49d) の文法性の差については今後の課題とする。
25. (55) の不定詞 Wh 節の p*P としての派生については (37) を参照。
26. (57) の中括弧で囲んだ部分の構造として (i) はあり得ない。Op の最終着地点である CP の指定部への移動が、一致によって引き起こされたものではないので、(20) の移動の制約に違反する。
 (i) *[_{CP} [_{Op}([Op])]₁ [_{for}([*θ*])] you to cut the ham with *t*₁]
27. 不定詞演算子節に絡む for は補文標識ではなく、不定詞節とは独立した前置詞句を成す前置詞である、と考えるべき根拠については、Jones (1985: 118), Berman (1974: 39) を参照。
28. (ia) のような例の派生として、独立した前置詞句 for you を含む (ib) を仮定すると、for を補文標識とする (ii) より容認度が高くなることが自動的に説明される。(ib) に含まれる不定詞 Wh 節は合法的に派生できるが ((28) を参照)、(iia, b) に含まれる不定詞 Wh 節は合法的に派生することはできない ((37)・(56) をそれぞれ参照)。
 (i) a. ?the knife for you with which to cut the ham
 b. the knife [_p*P for you] [_p*P [with which]₁ C to cut the ham *t*₁]
 (ii) a. *the knife [_p*P [with which]₁ for you to cut the ham *t*₁]
 b. *the knife [_{CP} [with which]₁ for you to cut the ham *t*₁]
29. (i) のような先行詞を意味上の主語とする不定詞目的節、および、(ii) のような先行詞を意味上の主語とする不定詞関係節については、西前(2013)を参照。
 (i) We brought him along [to show us the way]. (Jones 1985: 23)
 (ii) ?A man to fix the sink is at the front door. (Chomsky and Lasnik 1977: 464)

参照文献

- Bach, Emmon (1982) "Purpose Clauses and Control." In Pauline Jacobson and Geoffrey K. Pullum (eds.) *The Nature of Syntactic Representation*, 35-57. Dordrecht: Reidel.

- Baker, Mark (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Baltin, Mark R. (1995) "Floating Quantifiers, PRO, and Predication." *Linguistic Inquiry* 26: 199-248.
- Berman, Arlene (1974) "Infinitival Relative Constructions." *CLS* 10: 37-46.
- Bobaljik, Jonathan (1995) *Morphosyntax: The Syntax of Verbal Inflection*. Doctoral dissertation, MIT.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases." In Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta (eds.) *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-roger Vergnaud*, 134-166. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1977) "Filters and Control." *Linguistic Inquiry* 8: 425-504.
- Hasegawa, Hiroshi (1998) "English Infinitival Relatives as Prepositional Phrases." *English Linguistics* 15: 1-27.
- Hiraiwa, Ken (2005) *Dimensions of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture*. Doctoral dissertation, MIT.
- Hornstein, Norbert (1999) "Movement and Control." *Linguistic Inquiry* 30: 69-96.
- 石居康男 (1985) 「I have a topic on which to work.」『英語教育』第34巻5号、72-74. 東京: 大修館.
- Jones, Charles (1985) *Syntax and Thematics of Infinitival Adjuncts*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts.
- Kanno, Satoru (2008) "On the Phasehood and Non-Phasehood of CP." *English Linguistics* 25: 21-55.
- Matsubara, Fuminori (2000) "p*P Phases." *Linguistic Analysis* 30: 127-161.
- Pesetsky, David (1995) *Zero Syntax: Experiencers and Cascades*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- 西前 明 (2013) 「演算子を主語とする不定詞節について」『シルフェ』第52号、29-36. シルフェ英語英米文学会.
- Sportiche, Dominique (1988) "A Theory of Floating Quantifiers and Its Corollaries for Constituent Structure." *Linguistic Inquiry* 19: 425-449.
- (明治学院大学非常勤)
saizen@x.email.ne.jp